

## 金武御殿の祭祀と伝承〔2〕 — 那覇市首里、王族の系譜を汲む門中の祭祀と伝承の記録化 —

萩尾俊章<sup>1)</sup> 野村朝生<sup>2)</sup> 大湾ゆかり<sup>3)</sup>

The rites and tradition of Chin-udun munchu〔2〕

- The descriptive works concerning to rites and tradition of Chin-udun munchu descended  
the royal family, Shuri, Naha city -

Toshiaki HAGIO<sup>1)</sup>, Chousho NOMURA<sup>2)</sup>, Yukari OWAN<sup>3)</sup>

はじめに

那覇市首里の金武御殿に焦点をあてつつ、王族の系譜を汲む当該門中の活動や祭祀、それらにまつわる伝承を記録化するのが本稿のねらいである。今回はその第2稿である。前回と同様に、本稿の記述にあたっては、金武御殿の門中に関する様々な資料や写真を提供いただき、金武御殿の様々な経緯や伝承をお話頂いている野村朝生氏（金武御殿門中会事務局長）に共同執筆者として加わっていただいている。本文の記述は基本的に萩尾が執筆し、経緯や伝承を含めた事実確認などは野村氏（以下、敬称は略した）に監修的な役割をお願いした。さらに、博物館の大湾ゆかりも内容の確認のために共同執筆者に入っていた。本稿では前回取り扱った祭祀以外の年中祭祀も詳しく触れる予定であったが、祭祀分野に関しては実際の参与調査ができていないものが多いため、今回は門中会事務局長・野村朝生の写真記録と説明による伝承を中心に記録するようにした。

### 1 金武御殿の御神壇と神御棚

現在の金武御殿は首里大中町に宗家のウカミヤ（御神家）の祠堂「仁淵堂（じんえんどう）」があることは前稿で紹介した。その中で一般にいう仏壇や神棚に関して、執筆者（萩尾）の取り違いによる誤

記もあったので、この場を借りてお詫びして、修正しておきたい。

「戦後の再建にあたっては台所を西側に移し、かつての二番座に仏壇とグシンドン（御神棚）を設置していることになり、逆転した配置となっており、一般と異なる間取となっている」と記したが<sup>注1)</sup>、金武御殿では一般にいう仏壇には「グシンドン（御神壇）」、神棚には「ンチャンウタナ（御神御棚）」と呼んでいる。したがって、ここでは「かつての二番座にグシンドン（御神壇）とンチャンウタナ（御神御棚）と記すべきであった。現在はかつての二番座が一番座の広間として用いられており、向かって左にグシンドン（御神壇。以下「御神壇」と表記）、右にンチャンウタナ（御神御棚。以下、「御神御棚」と表記）が設けられている。

一般に首里の宗家では、一番座の神棚をンチャンウタナ（御神御棚）あるいはカミウタナ（神御棚）といい、祀られる神を首里・那覇の旧家ではウカミヌメ（御神の御前）という。それが祖神であればンチャンファーフジ（御神考妣）という。二番座は仏壇がある。仏壇には首里・那覇以外では通常「ブチダン（仏壇）」というが、首里の宗家では「グリーンジン（御霊前）」あるいは「グシンドン（御神壇）」という。仏壇上部の壁面には扁額、両側の柱には一

<sup>1)</sup> 沖縄県教育庁文化財課（史料編集班） 〒901-1105 沖縄県南風原町字新川148-1

<sup>2)</sup> 金武御殿門中会事務局長 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-30

<sup>3)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1  
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

対の聯を掛けてある家もあるとされている。<sup>〔注2〕</sup>したがって、金武御殿でもこうした名称や聯の設えを確認することができる。

なお、平敷令治『沖縄の祖先祭祀』には向氏金武家のことが紹介されている。「同家の大広間の上手に神御棚、左側に御神壇が設けられている。神御棚には右に弁財天、左に関帝王の掛絵が飾られている。戦前は七福神の掛絵もあったが、すべて戦災で失われたため、戦後柳光観に弁財天と関帝王を描いてもらったという。沖縄戦のさなか、祖母が系図と位牌札を持ち歩いていたが、戦火でたおれた。その後系図と位牌札はアメリカ兵によって本国に持ち帰られたが、1953年に返還された。御神壇中央に尚久王の神主が安置されている。銘は『尚久王神位』である」として経緯も含め記録されている。<sup>〔注3〕</sup>

さて、金武御殿の御神壇の神位・位牌は三座ある。前稿で記したように、右端の神位は尚久王以下九代の直系の位牌で、第二尚氏第八代尚豊王の実家の神位が祀られている。尚豊王の生父母である尚久王、王妃一鏡妙圓から始まり、尚豊王以降の歴代の先祖が祀られている。中央には三枚の位牌札（上下に戒名が記される）があるが、これは戦後位牌が戻ってきた際に位牌立てに入れようとしたが、いずれもサイズが合わないため、仏壇の中央に位牌札のまま奉納してあるという。位牌札が長いことからコーナー位牌ではないか語られる。さらに左側の位牌は次三男や子ども、未婚で亡くなった女性など分家筋の位牌となっている。

かつてユタの関与があつて、御神壇の神位・位牌の配置が行なわれた経緯があることから、今年度になり、神位・位牌の配置が正しくないとの判断により、中央に「尚久王以下の神位」、右側に「分家筋位牌」、左側に三枚の位牌と配列を組み直した。

これらの神位・位牌について少し詳しくみておきたい。次に記載する「金武家系図補遺」のファイルにあるメモと現物の確認により、表面と裏面に記載された銘書を表したのは図1～4である。銘書は図1「尚久王以下の神位」の表面は尚久王以外は王妃の「金武の大あんしられ」が「一鏡妙圓」と記されているようにすべて戒名で記載されている。<sup>〔注4〕</sup>図5・6「分家筋位牌」や図7の位牌札についても同様である。「尚久王以下の神位」と「分家筋位牌」の

型式は屏主・上下二段型である。「尚久王以下の神位」はサイズが大きく縦70cm、横62cm（各最大幅）で、上段・下段に15枚の位牌札がはめ込まれている。「分家筋位牌」のサイズは縦47cm、横31cm（各最大幅）で、上段・下段に11枚の位牌札がはめ込まれている。三枚の位牌札サイズは縦27cm、横3cmである。



写真1 尚久王以下の神位(右)と分家筋の位牌(左)

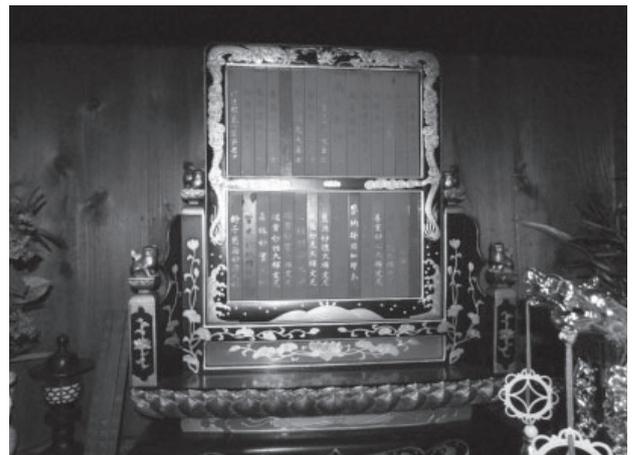


写真2 尚久王以下の神位



写真3 位牌札3枚

「尚久王神位」及び「分家筋位牌」の屏主ともに外枠は黒漆で、上部中央に宝珠を描き、その両脇に二匹の龍（三爪）、下部に波紋がいずれも金泥で描かれる。屏主の位牌札は赤色の漆塗で、屏主の上段は男性、下段は女性である。型式面では「尚久王以下の神位」がサイズが大きいという点で違いがあるものの、その他の点ではすべて意匠・デザインも含めて共通している。

「尚久王以下の神位」は米国へ渡っていた経緯もあり、配列が雑然としていたため、今回、野村が家譜とも照合しながら昭穆の原則に依りながら配列を

組み直した。

図1の下に示した〔付図〕※1と2は「尚久王以下の神位」の後ろ側に別に組み込まれていた位牌札である。また、図3・4は表面（下段）の裏に別の位牌札があり、それを転記したものである。

「分家筋位牌」の位牌札をみると、卒年の年号は男性が「万曆二十三年」2枚、「万曆三十三年」1枚、「乾隆二十年」1枚、それに明治期2枚、昭和期5枚と時代幅にばらつきが認められ、順列の並びも乱れているようである。前稿にも記したとおり、位牌が沖縄戦のさなか、米兵によりアメリカに持ち

図-1 尚久王以下の神位 <表面>

新損館寛心宗英居士	仁岳壽高大居士	壽翁宗仙大居士	安娘常心大居士		向弘徳元大居士	尚慶慈明大居士	尚久王神位	尚盛道源神位 ※2	公運英選大居士 ※1	尚永泰仁春大居士	新損館温心元良大居士	龍徳雲休大居士	仙岳道壽大居士	義峯道忠大居士
鈴子慈海妙澄大姉		瑞雪妙怡大禪定尼	端雪妙實大禪定尼	桃蔭妙見大禪定尼	心鏡明安大姉	慈源妙徳大禪定尼	王妃一鏡妙圓神位	恩納按司加那志	善室妙心大禪定尼	坤徳良儀大禪定尼	秋光淨白大禪定尼	眞珠妙實大姉	智光妙仙禪神尼	寂室妙光大姉

図-1〔付図〕

※2		※1	
(裏) 萬曆二十三年乙未十月二十三日	(表) 悅岩龍歡大禪定門	(裏) 天啓二年壬戌十一月二十日卒	(表) 尚瀛清公大禪定門

〔付図〕※1・2の札は「尚久王以下の神位」図に示した※1・※2の札の後ろ側に納められている。

図-2 尚久王以下の神位 <裏面>

	明治四十一年戊申旧二月十八日卒朝芳		光緒五年己卯六月廿二日卒
	光緒元年乙亥十二月二十二日卒		
	道光元年辛巳十二月二十九日卒		乾隆五十九年甲寅十一月廿八日卒
	乾隆二十五年庚辰三月二十日卒		乾隆五十年乙巳七月二十日卒
	雍正十年壬子二月六日卒		乾隆三十四年己丑七月二十三日卒
	康熙二十七年戊辰十月三日卒		康熙五十五年丙申二月十二日卒
	康熙二年癸卯十月二十五日卒	尚久王子妃 康熙年間旧十月一日卒	
泰昌元年庚申三月十五日薨 明治三十七年五月六日御奉安		明治三十七年五月六日卒御奉安	The Princess Kyo-Myo-En who died May 6 1906
順治十年癸巳三月二十三日卒 Koenji residing at Meiji Univ. and a Samurai. Died Mar 1654		康熙四十一年壬午十一月十五日卒	
康熙四十八年己丑七月二十八日卒		乾隆五十八年癸丑八月二十日卒	
		雍正十年壬子二月二十一日卒	
乾隆四十四年己亥四月二十四日卒		乾隆三十四年己丑十一月廿六日卒	
咸豐八年戊午六月二十一日卒		道光二十一年辛丑十二月三日卒	
光緒十八年壬辰十月十五日卒			
大正拾參年甲子五月廿九日卒 旧四月廿六日		大正拾壹年七月六日卒ス享年廿六 旧閏五月十二日	

図-3 尚久王以下の神位<下段第2面・表面>

梅嶺常清大禪定尼	月心妙皎大姉		二女脱仙大姉	長女玉質童女	真鶴金花岳神尼	利昂妙徳大禪定尼		梅嶺懷玉神位		通源妙徹大姉
----------	--------	--	--------	--------	---------	----------	--	--------	--	--------

図-4 尚久王以下の神位<下段第2面・裏面>

天啓四年甲子十月六日卒	道光十年庚寅八月六日卒			咸豐二年壬子八月廿一日卒 真鍋樽按司	勝連王子 妻生日忌不傳大正拾一年舊三月二十日	康熙十五年丙辰六月四日卒		萬曆二十四年丙申六月廿二日卒		道光三年癸未六月八日卒
-------------	-------------	--	--	-----------------------	---------------------------	--------------	--	----------------	--	-------------

図-5 分家筋位牌 <上段>

表面		裏面	
夏月林清信士		仁心道徳善童子	明治廿五年旧辰六月十八日卒
春齋龍長大禪定門		清岩道浄信士朝軌	乾隆二十年乙亥十月廿七日寿二十七
雪江童子大禪定門		即空宗心信士	暁星善童子朝惠 昭和十四年一月 享年一才
一蕙宗褪大禪定門		智心良勇居士	明治三十年八月二十二日卒
青雲勇光信士		靈山宗健信士	幻善童子朝光昭和二十六年七月二十七日卒享年二才
歸眞 靈位			金武朝健昭和四十年九月十六日卒享年六十一才
青雲勇光信士			青林道遊信士
一蕙宗褪大禪定門			金武朝勇 昭和三十三年八月六日卒 享年二十二才
雪江童子大禪定門			万曆三十三年乙巳五月二十日卒
春齋龍長大禪定門			万曆二十三年十一月二十一日卒
夏月林清信士			万曆二十三年己未八月六日卒
			朝健五男朝清昭和六十二年九月五日旧七月十三日 行年二十九才

図-6 分家筋位牌 <下段>

表面		裏面	
孝岩妙永大禪定尼		淳徳妙英大姉	嘉慶十二年丁卯年四月六日卒
壽徳妙昌信女		雲峯妙清大姉	乾隆五十年乙巳十月十三日卒
農功仁心禪定尼		唯一妙貫禪定尼	嘉慶十八年癸酉六月十二日卒
壽徳妙昌信女		清月妙祥信女	文子昭和三年十二月十一日卒享年四十九
雅心妙和大信女		圓月妙輝大姉	自薫正伸長女
壽徳妙昌信女		瑞心妙徳信女	輝代 昭和十三年十二月廿九日卒
農功仁心禪定尼		カマド 昭和二年八月享年五十七	
壽徳妙昌信女		康熙五十八年巳亥正月八日卒	
農功仁心禪定尼		明治四十一年戊申四月十二日卒	
壽徳妙昌信女		康熙三十一年壬申七月廿二日卒	
孝岩妙永大禪定尼		明治四十年未旧四月六日卒	
		康熙五年午十一月十五日卒	

図-7 位牌札<表面>

禅庭唯定信士		自孝良空信士	上段
慈心妙熙大姉	雪山妙白大姉	順心妙徳大姉	下段

去られその後返還されたことを考え合わせると、本来あるべき位牌札がなく、すべてが揃っていないことが推察される。現に野村朝生が指摘するように、七世金武朝洪の位牌札が見あたらない。これら神位・位牌が無事に沖縄へ戻ってきたとはいえ、沖縄戦の傷跡が今でも残されている。このことについて、次の「金武家系図補遺」の記録にも経緯が補足されているので、参考にしていただきたい。なお、今回、神位、位牌を確認することにより、図1～7のとおり、位牌札に記銘された人びとの詳細が記録できたことから、次号において家譜記載の人びととの照合を行ないつつ関係性を整理したい。

## 2 金武家系図補遺

金武家の家譜はだいたい第十三～十四世までが記されているが、他の家譜と同様に、記述は童名や字名、生年や享年、それに若干の元服・位階事項を記すのみで簡易的である。金武家ではその後の世代について「金武家系図」として記録が作成されている。十二世～十八世までの系図が網羅され、「昭和六十三年一月現在」と記されており、金武朝宣が作成したものである。

以下、本稿ではその全文について基本的な事実経緯を掲載するようにつとめたが、中には出生関係を明らかにする記述もあり、記録としては重要であるものの、現世代に近い人たちも含まれていることから、そのような箇所や個人認識に関わる内容については割愛することをご理解いただきたい。本文には呼称や名称等に誤記が認められたため、必要に応じ

て、野村が加筆修正した。文章とともに系図も作成されているが、紙幅の都合もあり、これについては省略した。

### 【十三世】

父は十二世朝昌也

長男 朝穩〔漢那のウメー（御前）〕

嘉慶廿五年庚辰（1820年）生

○妻向氏豊見城王子朝祥の女眞嘉戸。霊位は当蔵の豊見城御殿にある。子なし。

\*生前に夫が妻を連れて来たため、怒って実家へ帰りそこで世を去ったため。

○妾西原間切掛福村百姓仁王玉城の女眞牛

○両後妻 棚原親方の長女武多志。長女眞加戸樽（野嵩御殿）の尚泰公長男尚典との結婚調べのため、両後妻棚原親方の長女武多志を嫁る。

長女眞鍋樽

○向氏仲里里之子朝睦に嫁す

次男朝診（早死廿三才）

道光六年丙戌（1826年）生

次女眞呉染金（夭亡二才）

霊骨は銘刈墓に有ったのを戦後、朝宣家墓へ安置す。

三女思武太金

向氏大宜味里之子朝功に嫁す

四女眞牛金

阿氏前川里之子親雲上守房に嫁す

三男朝用（朝輝家始祖）

道光十五年乙未（1835年）生

妻毛氏池城里之子親雲上安應の女思亀

五女思戸（夭死）

四男朝規

道光十七年丁酉（1837年）生

妻馬氏幸地里之子親雲上良昇の女眞鶴娶り一女あり。

五男朝明（死二十八才）

道光十九年己亥（1839年）生

向氏國場里之子親雲上朝張の女思戸を娶り一男あり。

○同治五年（1866）六月四日卒

○朝秀家（具志川在）始祖

#### 【十四世】

父は十三世朝穩

母は妾眞牛也

長男朝芳（童名思龜）

咸豐十一年辛酉（1861年）生

妻大里王子次男（名不詳）の女思戸金

後妻西原村喜屋武家の女カマド

長女眞加戸樽（野嵩御殿）

和名祥子

尚泰王長男尚典に嫁す

次女眞牛金

大里御殿（首里大中村）に嫁す

三女武多志

嘉味田殿内に嫁す

次男朝信（死七十三）童名龜千代

明治六年七月十三日生

妻宮川家娘カメ（後離別）

後妻勝連盛相長女ナへ

第二次世界大戦前迄識名園管理人、戦争中知念村字志喜屋に避難中に死亡。遺体は御殿小屋敷より下の海岸に葬られる。娘眞嘉戸金（のちの和枝）が魂しいウンチーし、墓に安置す。

○後妻ナへの遺骨の件。銘刈墓立ち退きの時山川へ移動してきたが、その後不明となり、骨壺には灵石のみ

四女眞宇志金

百名殿内へ嫁す

五女眞鍋樽

母は両後妻武多志也。小那覇殿内へ嫁す

六女蒲戸

宜湾親方の長男朝松へ嫁す

三男朝慧（童名 思松金）

母は両後妻武多志也。

明治十二年四月十四日生

妻北谷村崎原家娘ナへ

四男三郎（庶子）

霊位は名護の金城家にあり。娘、銀行山城へ嫁した人あり。

五男眞蒲戸（庶子）

母は北谷村謝莉、屋号安谷屋小比嘉家の長女也（現姓、仲村渠）。子、二女あり。

#### 【十五世】

父は十四世朝芳也

長男童名眞三郎（夭死）

長女咲子

明治廿二年十月九日生

首里當蔵町佐久間正文へ嫁す。

以上母は大里王子次男の女思戸金也。

次女薫

明治三十四年五月六日生

首里桃原町玉城尚秀へ嫁す

三女芙美（死六十九才）

明治三十六年十二月三〇日生

首里赤平町桃原良謙へ嫁す

四女ナへ

首里大中町大里朝徳へ嫁す

五男朝盛

母は大里王子次男の女思戸金也。

妻鈴子、尚泰王の娘也。

早稲田大学卒、新聞記者

八男朝健（死六十一才）

父の家督を継ぐ

明治廿八年九月一日生（巳の人）

昭和四〇年九月十六日卒

妻玉城尚秀の長女輝代

後妻首里山川町池城安廷の二女文子

母は西原村（運玉）喜屋武家娘カマド也

東京美術学校卒業

#### 【十六世】

父は十五世八男朝健也

長男朝勇（死廿三才）

昭和十年二月十七日生

次男朝忠（夭死二才）

昭和十三年十月八日生

昭和十四年一月二十日卒

三男朝光（夭死三才）

昭和廿四年三月七日生

長女洋子

昭和廿六年八月七日生

四男朝秀

昭和廿八年六月二十八日生

次女弘子

昭和三十年十二月十六日生

五男朝清（死二十九才）

昭和三十四年五月二十九日生

- 十三世長男朝穩は達筆で廃藩置県で薩摩の兵より注文多く、知念村字志喜屋の別荘へ逃げる。別荘は管理者屋号カーンタ小へ無償譲渡され、現在も御殿小屋敷としてある。
- 十四世長女眞加戸樽（野嵩御殿）和名尚祥子。琉球最後の王尚泰公の長男尚典に嫁し、卒したる時は琉球最後の王朝式の荼毘（ウツクマツドゥン 大玉陵 まで道に白布を敷き）をされ、玉陵に納骨された人。父は長女結婚の血統調べのため、両後妻棚原親方の長女武多志を嫁る。
- 十四世長男朝芳は波の上宮宮司で、祭礼には正装し馬に乗り、先導を務めた人。
- 十四世朝芳後妻カマド（死七十七才）  
明治二年十一月二十日生巳  
西原村喜屋武家の娘で、第二次世界大戦時、靈位札・本系図を持って島尻郡与座ガー附近で死亡。靈位札と本系図は米兵に拾われ、ハワイアメリカ本国へと渡り、同兵が戦後琉球政府立博物館に返納されたのをユタより知り、門中会長漢那朝常氏等の努力により無事御殿へ返された。
- 野嵩御殿  
三殿内（赤田首里殿内、儀保殿内、眞壁殿内）を一つにし、天界寺跡に建立す。
- 十四世朝信の叔母ウトは玉城親方へ嫁したが、夫の乱暴もあり朝信が実家（金武御殿）へ連れ帰った。
- 十二世次男朝宜（伊是名家始祖）玉城御殿の娘を妻としたが、子どもができず、西原村出身の女を妾とし、長女をもうけ、その長女眞宇志金は松山王子尚順へ嫁す。戦前は現在の首里材木（松崎のウマイ）附近に借地居住。
- 現在の百名家  
バプテスト教会近く（久高宅隣）。民子様は再婚し、仲原姓で、靈位は養子が他に移動す。
- 御寝所（墓）は那覇市字銘刈にあった（約二〇〇坪）が、戦後に米軍用地として接収され、その後、那覇市有地となる。
- 朝穩（十三世）本妻靈位の件。豊見城御殿（当主フィリピン妻節子）（首里当ノ蔵スーパーおおく

ら向かい）に別にしてある。

○野嵩御殿洗骨焼香

昭和五十年三月十五日（旧二月三日卯）。当主、尚裕氏、足骨、その他少々あり。かんざしその他紛失（参加者 金城和枝）

○十三世朝規の件

十二世の四男で子供は女二名。十四世朝持の二男朝岡（コウ）は座間味島の宮平家に養子入りし、その後同地で戦死した。

墓は金武御殿山川墓所の入口側にタンク墓なり。

○十三世朝明の件

父は十二世朝昌也。両親早死のため、末っ子で前川殿内へ嫁した姉（十三世四女眞牛金）に養育された。

○朝澄の件

右朝明の孫で金武御殿にて居住し、独立後は波の上に移住し、波上の「金武小」と呼ばれ、大正劇場の管理人で、金武の亀（カミー）と呼ばれていた。

○朝秀の件

右朝澄の二男で、幼少の頃、座間味村阿嘉島にて成育し、通称「ひろし」と呼ばれ、戦後、具志川方面で理容業を営み、金武御殿門中会長職を務める。

○十四世眞蒲戸

（父は十三世朝穩、庶子）妻、石平出身小渡の女（元首里人）で名不詳。夫の死別後、宜野湾上原屋号「二又上原家」へ両婚す。

○靈位は妻が健在の時、娘二人連れ、主人の靈位は十四世三男朝慧の子供達にさせてくれと北谷によく来て頼みであった。戦後、朝慧長男朝栄夫婦がウンチケーの段階で断り、金武和枝が急遽引き受け、朝宣宅へ安置す。

○長女カマド（春子）

伊差川家（大阪大正区）へ嫁す。昭和五十六年八月三十日卒。

○次女ウト

普天間家（宜野湾市）へ嫁す。屋号「後普天間小」。昭和二十年、第二次世界大戦中死亡す。子供あり。

以上が「金武家系図」として記録されたメモの全容である。

### 3 金武御殿の年中祭祀②～旧正月・彼岸・御清明～

首里地域の御殿・殿内においては、各々の年中祭祀が継続して実施されているところがありながらも、全体として簡素化の傾向にあったり、特定の祭祀に重点が置かれたり、祭祀の民俗的変容も進行している。なかには、護得久御殿のように、明治・大正と戦前の尚家祭事のすべてをリアルタイムで見ていた護得久和子様他が亡くなってからは祭事すべてが取り止めになっているところも出てきているという。

金武御殿の年中祭祀（いずれも旧暦）は正月、ウンチャビ（春の彼岸祭）、御清明祭、五月十五日ウマチー（稲穂祭）、六月十五日ウマチー、六月カシチー、七月七日七夕、七月十三日～十五日盆、八月カシチー、ウンチャビ（秋の彼岸祭）、九月九日重陽（菊酒）、冬至、ムーチー、十二月ウグワンブトウチ（御願解き）などが主な祭祀であるが、前稿では旧暦五月ウマチーと旧暦七月の盆行事を中心に報告した。本稿では野村朝生の伝承と資料提供をもとに、旧正月、春と秋の年2回のウンチャビ（御彼岸）、御清明祭について記述しておきたい。

#### （1）旧正月及び七日祭事

御神壇の旧正月飾りはグシندانウカジャイ（御神壇御飾）といい、黄紅白の杉原紙の上にンパナグミ（御花米）九合に松風を順に重ねる。その上にデーデークニブ（橙九年母）を載せ、脇持にクガニー二個と炭昆布をお供えする。

旧正月の朝は「アサウブン（朝御盆）」として御神壇にお供えする。内容は御赤飯、ミヌダル、揚げ田芋、ドゥルワカシー、ラフテー、ジーマーミ豆腐、シヌイ、昆布イリチー、イナムドゥチである。これらはお供えした後に、グリーグ（御霊供）のウサンデーとして皆で分けて食す。朝の御茶は薄茶にナントゥンスーを御茶脇にする。ナントゥンスーはチリデー（木製の四角盆）のような大きな盆の中で粉をこね合わせて、それを型に入れ、2センチ位の厚さに伸ばし、落花生を花形に並べ、ごまを振ったものを蒸し上げたものである。<sup>〔注5〕</sup>

旧正月の御年日には御神壇に黄紅白の紙の上にみかんを載せてお供えし、前の祭壇には御神酒やお茶などをお供えする。赤ロウソクに火を灯し、香炉に

寿帯香の線香を立てて四拝礼を行う。寿帯香は「寿帯香アチレー（詠え）」とか、「ニューコーウスイジアツィレー（美御香御筋詠え）」という言い方をしている。現在、沖縄では入手が難しいため、上海から購入しているという。また、ウカリーウブン（御



写真4 旧正月朝 御茶湯時のお飾り



写真5 旧正月 御神壇御飾



写真6 旧正月朝のグリーグ(御霊供)のウサンデー

嘉例御盆)として赤飯、イナムドゥチ、クープ(昆布)イリチー、ラフテー、ジーマーミ豆腐、豆腐よう、和え物を食した。<sup><注6></sup>

また、床の間には旧正の床飾りを行う。「福祿寿」の長寿に関する書は門中の老人に依頼し、リン(聯)の対句は十代の若者に書いてもらっているという。字句は唐詩三百選から佳句を選んでいる。

旧正月七日は「七草ウジューシー」で、「クグワン(古貫)ウジューシー」とも呼んでいて、金武御殿では他の御殿・殿内とは作り方が違って、特徴的であった。精進料理として椎茸、キクラゲ、鳥にんじん、細切り鳥菜を胡麻油で味付けをして、その上に白玉団子を三個のせる。この三個は一つは天を表し、一つは地を表し、一つは人を表すという。一月七日に人が生まれ天地人が揃った祝いとされている。この伝承は金武御殿の眞嘉戸金おばあさんから聞いたという。

なお、参考に伊是名殿内(野村家)の旧正月についても簡単に触れておきたい。旧正月朝には御茶は薄茶でナントウンスを御茶脇にした。家族で正月の挨拶をする。また、御茶菓子は菓子(コウグワシー)、中国蓋碗に茶葉(香片茶)を入れ急須代わりに使い、小茶碗に御茶を注ぎ、お客に出す。さらに旧正月十五日の夜には、御霊前にサーターダーク六個一椀を女神の御供として、また同十九個一椀を男神の御供としてお供えしたという。

## (2) ウンチャビ(御彼岸)

金武御殿では、ウンチャビ(御彼岸)でのお供え物はウフウサンミ(大御三牲・大御三味)である。御清明祭でもウフウサンミを供えるが、ウンチャビではハマグリを二皿盛って供える点が大きな違いである。御神壇前の祭壇には、最前列にウクワシーウージ(御菓子黍。甘蔗束のこと)の五段重二組、九年母(みかん)15個二組、芭蕉実(バナナ)二組、二列目にクシチーウクワシー(甌御菓子)<sup><注7></sup>二組、紅饅頭(角膳)二組、紅飴餅15個(丸皿)二組、三列目に鯛(焼濱鯛)二皿、ハマグリ二皿、白餅15個(角膳)二組、四列目にマルヲードウイ(丸雄鶏)二羽、豚頭皮二皿、そしてその手前に豚三枚肉二組を供える。<sup><注8></sup>ウクワシーウージの五段重は必ず紅紙で巻くものとされている。



写真7 御彼岸のウフウサンミ

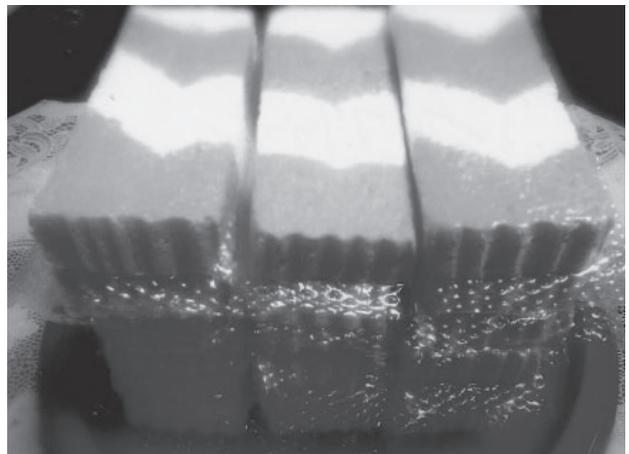


写真8 クシチーウクワシー



写真9 御彼岸の四拝礼

ウンチャビでは四拝礼を行う。合掌し、叩頭、興と平身を四回繰り返す。その後、燎紙銭ということ、ウチカビを燃やす。その後、あらためて四拝礼をおこなって祈願儀礼は終了する。

### (3) 御清明

金武御殿のウシーミー（御清明）はまず最初に玉陵墓であるウフタマウドウン（大玉陵）、「玉陵」を拝む。「ウフタマウドウンウシーミー（大玉陵御清明）」と呼んでいる。玉陵には 金武御殿の始祖・尚久王も眠る墓所である。戦後、金武御殿は毎年、欠かさず例祭を執り行ってきた経緯があり、2017年度までは尚家に代わり玉陵での御清明を実施してきた。

大玉陵御清明が終わると、次に金武御殿大宗の墓所である首里山川町の本覚山陵の墓所を拝する。本覚山陵（金武御殿墓所）では玉陵と格式が異なるので、御霊供も若干品少なくなくなる。ただし御清明祭の供物は御彼岸と同様の内容で、ハマグリが入らない形式である。ウチジフェシ（供物の一部切り替え）を施して御供えし、さらに山川陵での御清明を実施する。この「山川ヌ玉陵」は戦後、金武御殿のカミンチュたちの意向で、御清明祭の時にこの墓所を拝んでいた時期があった。供物は墓の右側に供



写真10 玉陵の御清明御霊供



写真11 本覚山陵の御清明御霊供

え、王族の弔いを目的に行ったという。ただし、門中の男性たちにはこの墓所をおがむことに反対する人たちもいた。その後ウノーイ（直会）を本覚山陵の庭で行うという。

その他に御清明祭については以前に拝みに行っていたところが数カ所ある。金武町にある「ハマヌタマウドウン（浜の玉陵）」である。金武御殿の2世・尚盛とその子どもたちが葬られていると伝わる墓所である。昭和初期までは供物の材料を担いで泊まりがけで御清明を行ったという。その後、墓室内の厨子を本覚山陵へ移し、土地は売却された。1975年頃、宅地になるということでカミンチュたちが墓前でヌジファの拝みをおこなった。

首里末吉町にある尚文公の墓所「チャーギヌ玉陵」も中城御殿の代理として拝んでいた。豊見城市平良・高嶺にある尚久王妃の生家である門中（寵氏）の墓所で、戦前から拝してきたとされるが、20年ほど前にカミンチュが不在になってからは拝みに行かなくなった。さらに那覇市奥武山公園内にある心海上人の墓所である。ここは金武御殿への参拝者が懇願して要請したことに対応して拝むようになったもので、理由は心海上人が尚久王の落胤との伝えで拝むべきとのことであった。1972年には沖宮の氏子と金武御殿の関係者が出資して墓所を整備した。その後、10年ほど御清明祭を実施したが、しだいに行かなくなったという。

このように、金武御殿の御清明をみてわかるように、戦前・戦後を通じて、祭祀のあり方の変遷や変容をうかがうことができる。次号では金武御殿のその他の年中祭祀やアガリウマーイ（東御廻り）等の巡拝祭祀等について報告したい。

#### 【脚註】

- (1) 萩尾俊章・野村朝生「金武御殿の祭祀と伝承〔1〕  
—那覇市首里、王族の系譜を汲む門中の祭祀と伝承の記録化—」『沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要』第12号 2019年、120頁
- (2) 平敷令治『沖縄の祖先祭祀』第一書房 1995年、143頁
- (3) 同上書、219頁
- (4) 仏名は、宗派によって呼び方が異なり、天台宗・真言宗・曹洞宗などでは戒名、浄土真宗では法名、

日蓮宗では法号と称している。

- <sup>(5)</sup> 松山御殿でもナットウンスを作ったという。これにはキス（ケシの実）を振っていた。（知名茂子『松山御殿の日々』ポーターインク 2010年、40頁）。『那覇市史 資料篇第二巻中の七 民俗編』（1979年）には、「年始客のもてなしは首里・那覇ではコー菓子、アンダーギー、ナットウンス、お茶などで簡単にもてなした」とある（『那覇市史 民俗編』202頁）。
- <sup>(6)</sup> 首里の格式を重んじる家ではユチグン（四ツ献）の料理を作った。四ツ献は膳にご飯、汁物、ウーニーやクーニーなどの豚汁、ウサチの四品を盛った形式をいった。ご飯は白ご飯の上に赤御飯をのせたもの、クマドーフのお汁（豆腐のあられ切りを実にしたすまし汁）、ウーニー（材料は豚肉・大根・昆布の豚汁）、ウサチ（大根やきゅうりの酢の物）であった（『那覇市史 民俗編』203頁）。
- <sup>(7)</sup> クシチーウクワシは米粉に砂糖を加えてこね、四角に作り蒸したもの。金武御殿では紅で色づけている箇所があり、白色の2色模様である。
- <sup>(8)</sup> 金武御殿との違いをみるために、首里の一般の彼岸について記しておく、彼岸には赤御飯とウサンミ（御三味）と餅を一对にして供えた。ウサンミは重箱に七品または九品の煮しめ物を詰める。重箱の代わりに鉢盛りにすることもあった。材料は主に、豚肉、魚のてんぷら、揚豆腐、カマボコ、カシティラ、ゴボーの天ぷら、大根、昆布、田芋の揚物などである（『那覇市史 民俗編』205頁）。